

# セクシュアリティとジェンダーの軋轢

——ジェンダー・コンシャスなゲイ・スタディーズに向けて——

伊野 真一

ゲイ・スタディーズは、セクシュアリティという分析軸の重要性を指摘したが、そのジェンダー・ブライ  
ンドネスは、フェミニズム、レズビアン・フェミニズム、メンズ・スタディーズから批判されている。そ  
こで本稿は、ジェンダー・アプローチから、ゲイのミソジニーと男性性を批判的に分析し、ゲイ・スタディ  
ーズの脱ゲッター化を促すことをその目的とする。このような問題設定は、近年注目を集めているクイアー・  
スタディーズに有益な視座を提供する。

## 1. 問題の所在——セクシュアリティと ジェンダー

「フェミニズムはセクシュアリティの理論の  
特権的場である、もしくは、そうあるべきだ  
という仮説にわたしは異を唱えたい。」というゲ  
イル・ルービンにならってセジウィックは次の  
ように主張する。「ジェンダーの問題とセクシ  
ュアリティの問題は、不即不離の関係にある—  
—といっても、一方が他方の言葉をつかってし  
か表現されえないという意味においてだが——  
にもかかわらず、この二つは同じ問いではない、  
いいかえれば、ジェンダーとセクシュアリティ  
は、たとえば、ジェンダーと階級だとか階級と  
人種とかいうように互いに峻別できる存在とし  
て想像可能な二つの分析軸を表している」  
(Sedgwick, 1989=1993:315)。そして、「ジェ  
ンダーのいかなる問いもある特定のセクシュア  
リティの特殊性をとおして具体化せねばならず、  
その逆もまた真なり、と想定することができる

が、にもかかわらず、分析軸を弁別することに  
は利用価値がある」(ibid:315)。

既存のフェミニズム、ウイメンズ・スタディ  
ーズの中にあつたヘテロセクシズム・ホモフォ  
ビア、異性愛の抑圧性・暴力性を指摘し、異性  
愛の自明性・自然性を覆したのが、レズビア  
ン&ゲイ・スタディーズである。このような異  
性愛の問題化をリッチは「強制的異性愛  
(compulsory heterosexuality)」(Rich, 1980=  
1989)、ウィティグは「ストレートの精神 (the  
straight mind)」という言葉で表現した (Wittig,  
1980)。レズビアン&ゲイ・スタディーズは、  
セクシュアリティ (必ずしも同性愛か異性愛か  
の問いに還元されない) の分析軸の必要性と重  
要性を強調した。

しかしながらその後、ゲイ・スタディーズに  
おいては、セクシュアリティ・アプローチに偏  
りがちで、「ジェンダー・ブラインドである」  
という批判がフェミニズム、レズビアン・フェ  
ミニズム、メンズ・スタディーズから寄せられ  
るようになる。ゲイ・スタディーズのこうした

偏向を、「ある者が抑圧される側かあるいは抑圧する側のどちらかにいるということ、もしくは、たまたまその両方の側にいたとしても、この二つの立場は互いにそれほど関係していそうもないということは、少なくとも男性のゲイ著作と活動においてはいまだ共通の前提事項となっているように見える。」(Sedgwick, 1989=1993:315-316) と、フェミニストのセジウィックは皮肉を込めて言う。

そもそもセクシュアリティのみならずジェンダーの軸によっても分析されなければならない理由は、第一に、セクシュアリティとジェンダーは、そのどちらか一方がもう一方の存立根拠となったり、密接に関連し合っているとき、両者を交錯させて考えることが有益な場合があるからである。たとえば、ジェンダーという性別と異性愛の共犯関係という問題設定は、異性愛という制度が性別を強化し、安定化させる一方で、性別が異性愛という制度を成り立たせているということである。第二の理由は、あらゆる抑圧は首尾一貫性をもたず、それぞれの様々な形態が相互に複雑に絡み合っているからである。ある抑圧に関しては被抑圧者であった者が、別の角度からみれば抑圧者であったりする。「抑圧の相異なる軸の比較は必要不可欠な仕事であって、それというのも、抑圧をランク付けするためなどではなく、全く反対に、それぞれの抑圧が文化組織の収斂するはっきりとした結節点と独特の暗示的關係を切り結ぶからにはほかならない」(Sedgwick, 1989=1993:316)。以上の点において、セクシュアリティ分析に偏りがちであったゲイ・スタディーズをジェンダー分析にも目を開かせ、その独りよがりを克服させることには意義があるのである。

このような視点でゲイ・スタディーズを考察する際、比較対象として意味をもつのは、フェ

ミニズム、レズビアン・フェミニズム、メンズ・スタディーズであり、他にメンズ・スタディーズの研究主体としては浮上してこない異性愛男性一般であろう。そこで本稿においては、これらを網羅すべく、それぞれを以下のように議論の展開の中に位置付ける。まず最初に、ゲイとは何か、ゲイ内部、つまりひとつのセクシュアリティの形態の内部にもある軋轢を論じる(2節)。次に、セクシュアリティにおいては問題を共有するものの、ジェンダーにおいて相違するレズビアンとゲイを比較する(3節)。これにより、レズビアンが2節で論じられたゲイとは対照的であることと、ゲイがジェンダー・ブラインドネスに陥りやすい背景が明らかになるであろう。4節では、3節で論じられたレズビアンと異性愛女性の関係を模して、異性愛男性とゲイの関係を「ホモソーシャル」という鍵概念を用いながら論じる。しかし、レズビアンの場合とは違い、そこには弊害が生じることとなる。というのも、ジェンダーの視点を導入すべきであるからといって、ジェンダーの一方の極である男性を無批判的に単に意識してみたところで、それは、非対称的な差異を問題とするジェンダーの本義とは乖離したものとなり、かえってジェンダー・ブラインドになってしまうからである。そこがジェンダー分析の難しいところでもある。そして、フェミニズムやメンズ・スタディーズにおいて常に批判されるところのミソジニー misogyny (女性嫌悪) と男性性(masculinity) について分析する(5節と6節)。ここでは、種々の問題が微妙に複雑に絡まり合い、結果としてミソジニーと男性性の問題が生じるさまが論じられる。5節においてはミソジニーの問題、6節においては男性性の問題と区分したが、この区分けはあくまで便宜的なものであって、双方にまたがる問題も当然ある。最

後に結びとして、本稿におけるこのような分析が、近年注目されつつあるクイアー・スタディーズにおいても必要不可欠であることが確認される（7節）。

## 2. ゲイ内部の軋轢

本稿においてゲイとは男性同性愛者を指すが、実はゲイ内部も多様である<sup>(1)</sup>。性的実践とセクシュアル・アイデンティティの間には必然的關係は何もなく、同性愛行為を頻繁に行っているにもかかわらず、ゲイ・アイデンティティを持たない人もいれば、同性愛行為を未経験のままでもゲイ・アイデンティティを持つ人もいる。「単に性的嗜好 (sexual preference) に関与するものである同性愛 (homosexuality) と、秩序転覆を目指した政治的生活様式を意味するゲイネス (gayness) との間の根本的な分離」(Weeks, 1985:198) は存在する。

そもそもゲイという言葉は、支配文化によって規定されたホモセクシュアルという用語を拒否し、自らをカテゴライズする言葉として採用されたものであり、スティグマの転換を象徴する政治的な概念である。であるならば、真の意味でゲイといえるのは、ゲイ解放運動を担うなど、政治的に目覚めた男性同性愛者である。そして、ゲイ解放運動にはそれほど関心を示さないが、ゲイであることを隠さずに自己肯定的な生活を送っている男性同性愛者がいる。後者も、ゲイとしての自己肯定的な生活様式をもつ点で、ゲイと呼ぶにふさわしい。後者のアイデンティティは、異性愛中心社会からの避難所的意味を当初もっていたゲイ・サブカルチャーの中で育った。ゲイ・サブカルチャーは、同性愛解放運動が起こる以前から存在し、ゲイ・アイデンティティの基盤をつくったともいえる。ゲ

イ・サブカルチャーの中で、ゲイは商品化され、消費され、ゲイ産業が築かれる。ゲイ産業はゲイ解放運動とは全く別の勢力となる。その典型が日本であり、日本のゲイの歓楽街はかなりの規模を有しているのに対して、ゲイ解放運動はまだ緒についたばかりである。ゲイ資本主義は、ゲイ解放運動とは異なった形でゲイの利害を明確化しているのである。ゲイ資本主義を担うゲイは、なんら革命を起こすこともなく、ゲッターの中で満足することが多い。

ゲイが性の政治の場に参入するにあたって、まず考えなければならない問題に、カミングアウト (coming out) の問題がある。カミングアウトとは、同性愛者がクローゼットから出ていく (come out) ことを意味する。つまり、それは、同性愛者が同性愛者であることを隠さずに公言することである。ゲイであることは、その特徴が不可視的であるために、自らゲイであることを言わない限り、ゲイであることは認識されない。よって、ゲイ・アイデンティティの確立にとって、カミングアウトは、重要な意味をもってくることとなる。また近年、アウトイング (outing) という行為まで登場している。アウトイングとは、ゲイであることを隠している有名人の名前を、本人の意志を無視して公表してしまうことである。今ではアウトイングは、カミングアウトしたゲイによって行われる場合が多い。

カミングアウトを行うどころか、ゲイ・アイデンティティすらもっていない男性同性愛者もちろん存在している。彼らは、本来の意味でのゲイにはあたらず、その多くは、クローゼットの中に閉じ込もっている。そして、彼らは、異性愛者のふりをする日常の社会生活と、同性愛者としての性的生活の二重生活を営む。彼らの中には、男性としての既得権益を偽装結婚ま

で行って守ろうとする者もいれば、人権獲得に無関心であるばかりか、同性愛者であることがばれるのを恐れるあまり、あえて意識的に同性愛者のふりをして、ゲイ解放運動に反発し、ゲイを嘲笑し、ゲイに対する差別的な発言をする者までいる。通常の社会生活ではパッシングをすることによって、彼らは裏切り者になるか、自分で自分を差別することになってしまうのである。しかし、クローゼットの中では、部分的な自由が与えられ、つまり、その中ではばれない限り、何でもできる。それゆえ、クローゼットとは、完全な自由の空間でも完全な抑圧の空間でもないことになる。何か窮屈さを感じる「クローゼット」という用語は、カムアウトしたゲイ側からのバイアスのかかった用語に過ぎない。クローゼットの中にいる彼ら、つまり、カムアウトしていない彼らは、ゲイであることのアイデンティティに縛られずかえって自由な存在であるかもしれない。

ここでいう偽装結婚とは、ゲイが女性と婚姻関係を結ぶことであるが、ゲイがレズビアンと結託して行う場合もあれば、ゲイが自らの性的傾向を女性には隠して行う場合もある。カムアウトしたゲイ、ゲイリブをするゲイは、偽装結婚を非難することが多い。一生涯を独身として過ごすことへの強い風当たりから仕方なく偽装結婚をしなければならない事情を考慮しても、社会的体裁を整えるために、女性をモノとして所有し、結果として家父長制の温存に加担する点においてはたしかに非難されるべきではある。しかし、ゲイの偽装結婚を、好きでもない(性的対象として、あるいは愛情を向ける対象として)女性と結婚すること、偽装結婚の功利主義的戦略だけをもっては非難されるべきではない。性と愛と結婚を一致させようとするロマンティックラブ・イデオロギーは、あくまでも

西欧近代に由来するイデオロギーにすぎず、また、今日の異性愛結婚においてもどれほど純粋に功利主義的でない結婚があるのかを考えればよい。

カミングアウトという概念は、ゲイを、カムアウトしたゲイとカムアウトしていないゲイに分断する。しかし、カムアウトしていないゲイの中にも様々あって、あえて公領域でカミングアウトはしないが、プライベートな空間で自己の性的傾向を強固に隠すことはしないゲイ、自己の性的傾向をあえて言うことはしないが、同性愛者のふりはしないゲイと、同性愛者のふりをして、時にゲイを嘲笑すらしてしまうゲイとは区別する必要があるであろう。さらに複雑なことに、ゲイを嘲笑するといっても、本心からそうしている場合、つまりたとえばゲイ自身のミソジニー(女性嫌悪)とホモフォビア(同性愛嫌悪)から女装したゲイをバカにするといったような行為の場合と、パッシングのための演技としてしている場合とがある。カミングアウトという用語とは別にオープンネス(openness)という概念が使われているが(Dankmeijer, 1993)、このような分析概念も必要とされるかもしれない。同性愛者を装わないことというような意味で、オープンネスという用語を用いることは分析にとって有益であろう。

このように、ゲイと一括りできないほど、ゲイは多様であり、各々の見解は相違し、時には対立する。よって、ゲイ解放運動において、ゲイ・アイデンティティを集団的に構築するのは非常に困難であると言える。ゲイ解放運動に関心をもつのは男性同性愛者の中でもわずかな部分、つまり少数派であることは間違いない。また、ゲイとは、単に西洋の白人の中産階級を表象しているに過ぎず、これらのカテゴリーが西

洋文化圏から発するエスノセントリズムであること、文化の差を考慮せず何もかもゲイというカテゴリーで括ることの暴力性が指摘されるようになってきた。

### 3. レズビアンとゲイ

上述したようにゲイがなかなか連帯することができない状況から、レズビアンとの連帯を模索するゲイは多いが、問題は複雑で、レズビアンのアイデンティティは、その構成のされ方もその抱える問題も違う。単に同性愛だからという共通項で括ることはできない。レズビアン解放運動は、欧米ではフェミニズムの中で発展し、同性愛解放運動という括りの中では、ゲイ解放運動の陰に隠れて霞んでしまうことの方が多かった。

1897年ドイツに、男性同性愛者が中心となって、最初の同性愛解放運動組織「科学的人道主義委員会」(Wissenschaftlich-humanitäres Komitee)が結成された。彼らは、同性間の性交渉は先天的な衝動によるものであるという性科学者の理論を盾に男色を禁止する当時のドイツの法律に異議を唱えた。一方、女性は法にも値しないとされていたので、当然レズビアンは無視されていた。しかし、男性だけでなく女性にも同じような現象があることがわかれば、組織の中心的人物であるヒルシュフェルトが唱える、同性愛者を「第三の性」というカテゴリーで括る理論を補強することができる(2)。そこで、「科学的人道主義委員会」は、レズビアンと提携することの必要性を悟り、レズビアンの参加を要請し、それは実現した。しかし、その提携は必ずしもうまくいくものではなかった。それは、同性愛者に対する抑圧が法的にも世間の偏見ということでも主に男性に対して向けられていた

という事情はある。だからといって、レズビアンに対する差別がなかったということでは決していないが、何よりもレズビアンは女性として蔑視され、レズビアン自体が存在しないかのように無視されていた。ドイツに起こった歴史上初めての同性愛解放運動に、特に初めの数年間はレズビアンがうまく合流できなかったこの事実は、後のアメリカで活発になったゲイ解放運動においても、レズビアンがゲイと連帯するよりも、むしろフェミニズムの中でその主張を展開していったという経緯と符合するものがある。レズビアンは、父権的な価値観を押しつけてくるゲイとはなかなか共闘できなかったのである。レズビアンは、自分たちが同性愛者である以前にフェミニストであることを主張し、ゲイ解放運動から自分たちの解放運動に距離をおこうとする傾向が強かった。だからといって、フェミニズムの中でレズビアンは最初から偏見なく受け入れられたというわけではもちろんない。

上述のオープンネスという概念を用いると、ゲイの場合、男性という公的な存在として公的に管理されるため、カミングアウトとオープンネスとの差があまりなくなる。たとえば結婚をするというような異性愛者のふりをあえてしない男性に対して周りの監視の目は許さず、同性愛者という、公領域の一流市民としてあるまじき反社会的なラベルを貼り付けてしまう。結局のところ、ゲイの場合、カムアウトするのかもしれないかの二者択一を迫られがちである。同性愛者であるかないかという、本来プライバシーに属するようなことが常に公にさらされなければならないのである。私領域は、公領域に先立って存在する純粋に自由な空間ではなく、公領域の中に既に閉じ込められている従属的な空間であるといえる。

レズビアンの場合は、カミングアウトとオープンネスとは必ずしも一致しない。もともと公領域の市民でないとされてきた女性を異性愛者であるのか、同性愛者であるのかを執拗につきとめる必要性はない。あえてカミングアウトはせずにいて、異性愛者のふりをしないレズビアン（lesbian）の生活は成立しうる。これは、レズビアンにおいては、同性愛者であるということよりもまず女性であるということが社会では問題にされるということを示している。「レズビアン」というカテゴリーよりも「女性」というカテゴリーが重要であり、それゆえ、同性愛者差別の前にまず女性差別と闘わなければならないという欲求が彼女たちの中に生じることとなる。

レズビアンであるということは、同性愛者である以前に女性であることであり、女性こそが長い歴史の中で被抑圧者であったという事実を重く受けとめ、自分たちの存在を男性ではなく、女性とともにフェミニズムの脈絡で主張していこうという方向性は理に適ったものではある。ゲイは、自らの男性性を可能にしている、多くの社会的条件を当然のこととして享受していたが、レズビアンはレズビアンとして十分自立した生活を送るために、すべての女性が直面している根源的な問題（家父長制、雇用の不平等、性別役割分担、女性に対する暴力など）を語る必要があった。極端なレズビアン・フェミニストは、ホモフォビアは家父長制の価値観から生じたものであるから、家父長制を撲滅しさえすればよいとまで主張する。そして、レズビアンになることを政治的に選択するフェミニストも出現する。女性ではなく男性を愛し支えることはその文化・権力構造をも支えることになるから、異性愛からおりることによって、自分たちを抑圧してきた権力構造を彼女たちは拒むのである。このようなレズビアンは、「根っからの

(primary)」レズビアンに対して、「選択した (elective)」レズビアンと呼ばれることがある。ここでは、レズビアニズムは、忠実なフェミニストがなし得る崇高な選択なのである。

このように、女性であることにアイデンティティをおくジェンダー分離主義的傾向は、レズビアンを定義する際にジェンダーという変数を重視させる。その代表は、「すべての女性は、みなレズビアンである。」とするリッチの定義である (Rich, 1980=1989)。リッチの「レズビアン連続体 (lesbian continuum)」では、男性とは独立した女性の本質的關係が強調され、女性のヘテロセクシュアリティが社会的に構築されたものであり、女性同性愛が本質とみなされるのである。もちろん、ジェンダー重視派に対してセクシュアリティ重視派のレズビアンの定義もある。その代表は、バーバラ・クリスチャンの「他の女を性的に魅力的だと感じ、彼女の中に喜びを見出す女」というものである。ここでは、セクシュアリティがレズビアン独自のアイデンティティとして強調されている。また、ウィティグによれば、「女性」はヘテロセクシュアルな思考体系と経済体制のなかでしか意味をもたないがゆえに、レズビアンは女性ではない。このような多様な定義をもつレズビアンとは対照的に、ゲイ・アイデンティティは、セクシュアリティに基礎を置く一枚岩的なものとなっている。つまりジェンダーは、ゲイの政治的なアイデンティティの構築に際して、その構成要素とはならないのである。このような事情が、ゲイのジェンダー・ブラインドネスの背景にある。

#### 4. 「ホモソーシャル」とゲイ

上述のリッチのレズビアン連続体のように、

異性愛男性とゲイを繋げるゲイ連続体はないのであろうか。第二次世界大戦以前のドイツの、フリーレンダーの男性性モデルや当時の同性愛解放組織である「主体者連盟 (Gemeinschaft der Eigenen)」は、そのアイデンティティと同盟を異性愛男性を含む男性一般に求めた。彼らは、男性一般の間に存在するホモエロティシズム<sup>(3)</sup>の文化的重要性・文化的機能を強調することによって同性愛を正当化する。それは、異性愛者を同性愛に巻き込むことを狙いながら、ホモエロティシズムを男性性と結合させたものである。しかし、このような異性愛男性との連続性を強調する理論と実践上の戦略は、女性嫌悪的であることがある。彼らの主張は、男女が厳密な役割分担を維持している限り、結婚を排除するものではないし、家父長制は維持されるのである。

男性一般の社会的関係を説明する概念として、「ホモソーシャル (homosocial)」という概念がある。現代社会は、いまなお、男性同士の結びつきによって動かされている側面がある。そのような男性同士の緊密な関係 male bonding の問題が「ホモソーシャル」で表現される。「ホモソーシャル」とは、セジウィックによれば、以下のような概念である (Sedgwick, 1985)。「ホモソーシャル」は、通常意味するところの同性愛とは違う、基本的に異性愛の男性の集団と連帯である。したがって、同性愛と間違わないために同性愛を極端に嫌うホモフォビア homophobia (同性愛嫌悪) が特徴となる。同性愛者は徹底的に嫌悪され、恐れられ、排除される。また、独身者は、同性愛者とまぎらわしいので嫌われるか排除される。第二に、それはミソジニー misogyny (女性嫌悪) をその特徴とする。女性は、男性同士の緊密な関係に楔を打ちこむ危険な存在とされる。男性間の連帯を切

り裂く可能性のある女性は、排除されるか厳密なコントロール下におかれる。男性間の関係に女性が入りこむと、男性同士の争い、あるいは嫉妬が生まれる。

これを避けるために、二つの方策が講じられる。第一は、女性を厳密に特定の男性だけの個人財産にしてしまうことである。この裏返しとして、女性の連帯を極端に嫌うという傾向が男性の間に生まれる。第二は、女性を男性間の共有財産にしてしまうことである。女性の移動と交換を、男性がコントロールすることによって、男性間の絆を強めるのである。現代の家父長制にもそのような側面は多分にあり、基本的に女性の交換によって両家の家父長の連帯は強められる。たとえ男性が真剣に心から女性を愛していても、その慣習や行動は、女性を憎んでいる男と全く同じになるのである。結婚は、男性同士の親密な関係を切り裂きかねない危険な女性を体制内に回収し、男性間の絆を強化する制度となる。また、結婚は、公的に異性愛者であることを認められた男性間で成立する親密な関係を同性愛という汚名から守るための装置でもある。つまり、同性愛者でないことの証しである結婚を経て、男性同士の絆は強化される。

このように男性間の親密性 (intimacy) を強調する「ホモソーシャル」という概念は、ゲイを脱性化させるのには役立つ。ゲイが性的快楽、性的関係の問題にばかり関心を注ぎがちで、すべてを性に押し込めてしまっていることを指摘するレズビアンは多い。ゲイは快樂主義者で、セックスの自由がゲイにとっての絶対的目標であるかのように、レズビアンから非難される。レズビアンが、セクシュアリティに限定・幽閉されることなく、必ずしも性的でない関係性に目を向けているのに対して、ゲイは、性への固着が強く、レズビアンほど創造的な関係をつく

ることがなかったのである。

また、「ホモソーシャル」は、現状の男性社会を分析するには有効である。特に、「疑似同性愛的」であるといわれる日本には、この概念が適合する。「ホモソーシャル」は、文学のテキスト分析にも有効で、古今東西、男性同性愛を扱った文学の多くが、「ホモセクシュアル」な文学ではなく、実は「ホモソーシャル」なテキストであるとセジウィックは分析する。それらは、女性を介して実現される制度化された社会関係の構造の中にしっかり据えつけられた男性同士の愛を示しているにすぎない。古代ギリシアの少年愛も、女性の身体を通して子孫の再生産を肯定した上でのものであり、「ホモセクシュアル」なものとは言えないというセジウィックの指摘は示唆的である。

しかしながら、「ホモソーシャル」は、ホモフォビアとミソジニーが前提となっている以上、ゲイ解放の戦略としては成り立たない。「ホモソーシャル」的なゲイのアイデンティティの構成のされ方には問題が多い。「ホモソーシャル」は、「ホモセクシュアル」とは一応区別されるが、その関係は微妙で両者が密接に繋がっていく場合もありうる。そもそも「ホモソーシャル」な関係には、「ホモセクシュアル」的なものが潜在的にはあるからこそ、極端なホモフォビアが生まれる。「ホモソーシャル」と「ホモセクシュアル」とは、「ホモエロティシズム」という「ホモソーシャル」よりより性的な概念を媒介にして連続的に結ばれる。そして、「ホモソーシャル」と「ホモセクシュアル」とを厳密に区別しようとすれば、そこには結果として、ホモフォビアが生じてしまうというジレンマがある。

## 5. ミソジニーとゲイ

自己のセクシュアリティを犠牲にして、ただ社会的行動として強要されていることに従って行動しているだけであるという、ゲイが訴える被害者性に反して、フェミニズムの主張の中では、ゲイの加害者性、女性差別性が強調される。しかし、男性の同性愛的な欲望が第一義的に、必然的にミソジニーと結びついているというわけではない。ならば、両者の連帯もあり得ないはずはない。

異性愛女性のレズビアンに対する嫌悪よりも、異性愛男性がゲイに対して抱く嫌悪はより強い。これは、単にホモフォビアだけでは説明がつかず、ミソジニーが原因でもある。ゲイを軽蔑するのは、男性が女性を蔑視するのと密接にかかわっている。異性愛中心主義社会は、男性の中に潜む「女」を悪魔祓いし、「女」の悉くをゲイに帰属させてしまうことによって実現する。ゲイはそのために社会的に必要とされる。2つの意味において男性でないことによって、ゲイは抑圧される。ひとつは、女々しいということであり、もうひとつは、女性を所有しないということである。ゲイになることは、異性愛男性からすれば、一流市民からの転落、ハイアラーキーでの転落を意味するのである。

また、ゲイの性的関係においての受動的、従って女性的な所作が憎悪される。ゲイの性行動としてすぐに想起されてしまうアナルセックスも受動的である行為のイメージによって嫌悪される。古代ギリシア以来、挿入されるということは権力の放棄を意味していた。また、男っぽい女が肯定的に受け取られることはあっても、女っぽい男は嫌われるか、笑われる。ましてや女装した同性愛者は墮落した怪物であった。男性の異性装者だけが倒錯者扱いされる。渡辺によれば（渡辺, 1986）、近代文明とは、男性が女

性と共通の性質を実現することを禁止する文明であり、近代化とは、アンドロジナスを放棄していく過程である。

このようにゲイの中にある女性性が徹底的に嫌悪されるのであれば、ミソジニーをフェミニズムとゲイの共通の敵とすることによって、ゲイのフェミニズムとの連携は論理的には可能であるはずである。しかし、フェミニズムの中では、ホモセクシュアリティはミソジニーの極端な変種ということになってしまう。たしかに、ゲイが、自らのミソジニーや権力・搾取の問題に無自覚的であるということはある。フェミニストであるセジウィックによれば、女性は、ホモセクシュアリティを嫌悪しているのではなく、むしろ、女性の身体を通して、権威ある男性とのパートナーシップを強固ならしめようとする、男性のヘテロセクシュアルな欲望を嫌悪しているのである。つまり、フェミニズムが恐れているのは、「ホモセクシュアル」ではなく、「ホモソーシャル」なのである。こうして、セジウィックによってフェミニズムの敵は明確化される。そして、もしフェミニズムから「ホモセクシュアル」が嫌われるとしたら、それは、「ホモセクシュアル」自体に内在する何か「ホモソーシャル」と繋がって、ときにナショナリズムの色彩を帯びながら、ミソジニーを招く可能性があるからである。

ナチス以前からドイツにおいては、国家や軍隊の組織構造には典型的な男性結社の行動規範が組み込まれていた。そこには、男性結社が同性愛に対してとる2つのアンビヴァレントな姿勢——すなわち一方は、潜在的な同性愛を蔑んで、純マッチョ的なタイプの男性であることを要求する姿勢と、他方は、そこで結ばれる男性同士の関係が場合によっては性的含みを帯びるような男性同盟的姿勢——が併存している。

1941年にヒトラーは、SS（親衛隊）と警官隊を同性愛から引き離すための布告を発したが、その条項から軍隊がわざわざ除外されていたことと、SA（突撃隊）の指揮者レームの同性愛的行動を知りながらも、彼を擁護していたことは注目に値する。女性的なものへの接触を絶った勇敢な同性愛者こそがSAにふさわしいと考えていたレームにとって、同性愛者であることと、ナチ党員であることは、ナチスにおいて公的には同性愛は否定されていたにもかかわらず、何ら矛盾することではなかったのである。しかしその後、ヒトラーは、レームとの間に政治的亀裂が生じると、レーム粛清を行い、同性愛排除を世間に見せつけた。そもそも、同性愛に対するヒトラーの疑念は、それが墮弱の徴候であるとか悪徳であるとかいうことではなく、それが政治の指導者層に蔓延して、秘密結社をつくりだすことにあった。加えて人口問題に同性愛が及ぼす損害も憂慮されていた。同性愛的な連帯感や階級の枠組みを越え、国家の境界を侵犯し、家父長制的男性社会の秩序を脅かしかねないのである。

男性間の友愛は、共同体的意識やカリスマ的な指導力、戦闘的精神、自己犠牲などと結び付けられることによって、ナショナリズム的美徳をまとわされている。ホモエロティシズムが、近代ナショナリズムの一部であったとさえいえる（Mosse, 1985）。ホモエロティシズムは軍隊における忠誠と自己犠牲のために有益なので、ドイツ国家にとって多大の価値をもち、男性結社は、男性集団内部の厳密なハイアラーキーについての理想を表すモデルとなった。男性において服従的欲求を表現するには必然的に同性愛的動機によらざるをえない（Sombart, 1991=1994:139-140）。国家や権威のもとへの従属が行われるにあたっては、マゾヒズム的欲

動成分と同性愛的成分が動員される。つまり、国家の暴力のモデル（支配と服従のモデル）は、結婚における異性愛的権力関係を同性愛的に再生産することで機能している。また、ナショナリズムの局面において、人間の身体は、自然と国家の象徴として登場する。特に、男性ヌードは、精神的で国粹主義的な美質を反映する。たとえば、ドイツ・ナショナリズムでは、筋骨隆々のひきしまった裸の男性が、国民とその志の活力を表現するものとして崇拜される。そして、美と崇高さを、人種的理想型、人種の改良の可視的目標として明確化し、否応なく印象づけることによって、裸体像が有効な教育手段となる。しかし、芸術における男性的な美への評価の中に、同性愛に対する社会の寛容とミソジニーが現れることがある。ここに、美に対するギリシア的な感覚の復興こそが同性愛解放に非常な助けになるという、ナチスにとっては全く不都合な事態を招きかねない。

このような状況の中で展開された「主体者連盟」の、ホモエロティシズムの文化的重要性・文化的機能を強調する同性愛解放運動は、家父長制を是認するものであると同時に、ナショナリズムに絡め取られる結果となってしまった。女性の社会的役割は、隷属的奉仕によって特徴づけられ、そして、それは家族の中に閉じ込められなければならない。そうすることで、男性は、他の男性とともに自由に文化や政治に没頭できるとされた。このように、ホモエロティシズムは、位階的で権威主義的な政治構造、さらには女性性の拒否や抑圧と密接に繋がっていた。彼らは、ミソジニーを踏み台にして、同性愛解放を提唱していたのである。これを、当時の非常事態での特殊な展開であると看過することはできず、ホモセクシュアリティがホモエロティシズムを通じて、意図せざる保守的な結末

を招く危険性は常に存在するのである。ゲイとミソジニーとの複雑でアンビヴァレントな関係にゲイ自身が目を向けない限り、フェミニズムとの協調はありえない。

そして、よく指摘されるゲイ・スタディーズのミソジニーの典型に、古代ギリシアの理想化がある。フーコーに対して、「古代ギリシアの自由市民男性の性の倫理を取り上げ、これを現代に示唆的なものとしている」という批判が向けられる。なぜなら、この倫理とはもともと女性が排除された社会のものであり、女性の存在、男女間の相互作用が看過されているからである<sup>(4)</sup>。フーコーを持ち出すまでもなく、それ以前においてもそれ以後においても、古代ギリシア社会はユートピアとして熱狂をもって描かれる傾向が強かった。古代ギリシア社会とは、社会構築主義 (social constructionism) の立場からすれば、「同性愛」「同性愛者」という概念が存在しなかった社会であり、本質主義 (essentialism) の立場からすれば、「同性愛」「同性愛者」に対して寛容な社会であったのである。この傾向は日本においても、南方熊楠や江戸川乱歩等に顕著に見られる (伊野, 1996a)。

同様のことは日本にもあてはまる。日本の場合、近代的性倒錯概念が移入される以前の江戸期においては、男色と女色という対等な概念が存在していたことから、同性愛的行為に対する偏見のない時代として、前近代的な性秩序へのノスタルジーが喚起される。しかし、男色と女色という概念は、年少の稚児を相手にするのがいいのか、女を相手にするのがいいのかという、成人男性の立場に立った対概念にすぎない。当時、男色擁護派と女色擁護派に分かれてその優劣を競う舌戦が繰り広げられたが、男色擁護派の言説は、男を色に溺れさせ、イエの秩序をかき乱すことになってしまうような存在としての

女の劣等性を数え上げることによって成り立っているのである。この古代ギリシアと江戸期の例は、ジェンダーの分析軸を入れないためにその実態（ミソジニー性）を見極めることができず、安易に過去の時代に現代のヘテロセクシズムの解決策を求めようとするものである。

## 6. 男性性とゲイ

近年、フェミニズムを経て、男らしさの呪縛からの解放を唱えてメンズ・スタディーズが誕生し、メンズリブも小規模ながら出現している。アメリカには、大きなメンズリブの団体が2つある。ひとつは、「性差別に反対する全米男性機構 (National Organization for Men against Sexism : NOMAS)」で、この団体は、フェミニズムとゲイに好意的であり、多くのゲイが参加している。もうひとつは、「全米自由男性連盟 (National Coalition of Free Men)」であり、これはフェミニズムに反発し、ゲイについては敵視はしないが、公然と支持することはない。これまでゲイリブとメンズリブとの間には確執が存在していたが、ゲイ・スタディーズとメンズ・スタディーズは男性性 (masculinity) について多くの問題を共有している以上、お互いに無視できるものではない。事実、英米のメンズ・スタディーズの研究書の中にゲイの問題は登場することが多い(5)。

男性解放運動からは、ゲイであることは、既存の社会の公認された性役割からの逃避、男らしさに対する異議申し立てとして扱われ、歓迎もされた。しかし、この解釈は、1970年代終盤頃から1980年代初頭にかけて、ゲイ・サブカルチャーの中で、マッチョ、クローンなどの男性性を強調した恰好が目につくようになって、次第に信頼できないものとなっていった。メンズ

リブからの批判は、ゲイが因習的な男らしさを批判的に捉えておらず、男らしさを過度に意識して、ジェンダーをなぞるだけではないかというものであった。マッチョは、メンズリブにとっては否定したい、鬱陶しいイメージであったのである。

同性愛解放運動の転機となったストーンウォール事件 (1969年) (6) を勝利に導いた立て役者の中にはドラッグ・クイーンがいた。しかし、ポストストーンウォールを謳歌したのは、マッチョなゲイであった。かつて、ドラッグ・クイーンの戦略は、ケイト・ミレットの『性の政治学』において評価されていたが、ドラッグ・クイーンは、女性的であるとされた忌まわしい過去のゲイのステレオタイプをひきずる存在として次第に疎まれるようになってきた (笹田, 1995)。従来の伝統的な精神分析的解釈では、ジェンダーをセクシュアリティの起源とみなし、男を愛する男の魂は女であるとされ、魂が女であるからこそ男を愛するのだというように解釈されていた。このような解釈に対抗するために、ゲイは男として男を愛することができる」と主張するようになり、男らしさは守られるべき価値となったのである。そんな背景がドラッグ・クイーンの衰退とマッチョの興隆にはあった。

それ以後、マチズモは、ゲイ・スタディーズとメンズ・スタディーズにおける論争のテーマとなった。ゲイ・マチズモに対して、「セクシュアリティを抑圧するものを理想化している」、「自らの抑圧者を愛している」、「伝統的男性性に欲情するばかりか、それに自己同一化している」、「単なる外見どころかマチズモはセクシズムにつながる可能性がある」という批判が向けられる。ハルプリンは、ストレートのマッチョ的身体は、威嚇の道具であるが、ゲイのそれは、

権力を意味せず、欲望の対象・客体になることを意味すると分析する (Halperin, 1995:117)。ゲイ・マチズモは、マッチョ的的身体に欲情するという意味では、主体を形成するが、同じゲイの中の他者によって見られ、欲望の対象になるという点では客体を構成する。身体的美学的機能を女性一方に押しつけ、それを所有しようとする異性愛男性とは違って、ゲイのマッチョ的的身体は、男性の身体の意味を革命的に変える機能を果たす。

また、ゲイ・マチズモは男性性の記号を極端に誇張することによって、異性愛体制の秩序攪乱という政治的な意図をもったパロディーであるという解釈もされる。「ゲイのマッチョ・スタイルが、異性愛男性のアイデンティティの根っこを蝕んでいる」(Weeks, 1985: 191)。このような解釈に対して、ベルサーニは、「ゲイのマチズモへのこだわりは、深刻なまでに真剣な(パロディではなく)ものである。しかし、そのことは、彼らが、まさにそれにもとづいて裁かれ非難されている、当の男性性の表象を理想化し、それに劣等感をもってしまう危険を冒しているということの意味している。同性愛の欲望の論理には、ゲイ男性の敵に対する愛に満ちた同一化へのポテンシャルが含まれている。」(Bersani, 1988=1995:125)として、利敵行為につながることを憂慮する。

ゲイ・マチズモは、男性的な芝居がかった見せかけの記号の下では、つまり、実際の性的関係を見れば、必ずしもマッチョ的ではなく、マゾヒスト的であったりする。その意味では、男性性を男らしくない形式で再構成しているとも解釈できる。しかし、マッチョな装いがマスキュリンなゲイ・アイデンティティに波及すると、ミソジニーが噴出し、女性化したゲイへの嫌悪が始まる。さらに、ゲイ・マチズモと同様、

ジェンダー・コードを誇張し表現するキャンプ(camp)の一種でありながら、異性をモデルとするドラッグ・クイーンは、マッチョなゲイから、「女々しい」と罵倒されているという点ではミソジニーの客体となっているが、ドラッグ・クイーン自体がミソジニーの主体であるかもしれない。女性にとって抑圧の衣装である女性性をまねるのは、女性への嘲りであり、行為自体が非常に男性的であるというフェミニストの解釈もある (Frye, 1983)。

ゲイは、セクシュアリティの抑圧に目を奪われがちであるが、ホモセクシュアリティとともにゲイを構成する要素である男性性、そしてジェンダー(男らしさ)の抑圧に目を向けるならば、メンズリブと共闘できる。しかし、男性という権力的に優越した集団に属する男性(ゲイを含めて)が、男性性を自覚的かつ自己反省的に捉え、運動として結集するのはなかなか難しい。それは、男性解放運動が、フェミニズムにおける家父長制のような強烈な敵をもつことができないからであろう。

## 7. クイアー・スタディーズに向けて

以上から言えることは、あるひとつの抑圧(セクシュアリティの抑圧)に抵抗することが必然的に不可避免的に別の抑圧(ジェンダーの抑圧)の問題を生じさせているのでは必ずしもないということである。よって、ゲイ・スタディーズが、ジェンダーの問題を省察することは十分実現可能なことである。本稿では、ゲイ・スタディーズが何か悪者扱いされた感が残るが、この試みは、フェミニズムやメンズ・スタディーズに対して逆方向の問題(自己反省的にセクシュアリティの問題を捉えること)を突き付けることになる。また、本稿の分析視角は、クイ

アー・スタディーズにとって示唆的であるだろう。そこで最後に、本稿の研究意義を明確にするためにも、そのクイアー・スタディーズの登場の背景と意味を確認することとしたい。

少なくとも欧米の現代社会において、ゲイは「自明」なカテゴリーであった。しかし、フォーコーに代表される「セクシュアリティの歴史化」という作業の中で、社会構築主義 (social constructionism) 的分析の立場からは、同性愛者の自明性は覆され、それが歴史的文化的産物であり、それゆえなんら本質を持たないフィクションであるとされる。それにもかかわらず、現実の同性愛解放運動では、既存の二項対立を支持し、生得的自然のものとしての権利付けを行おうとする本質主義的なアイデンティティに根ざされた運動が展開される傾向は強い(7)。

男性同性愛者に対する蔑称であったクイアー (queer) という言葉は、近年当事者が自らを名乗るときにあえて使われるようになったが、それは、ゲイばかりかレズビアン、さらにはあらゆる性において周縁化された人々をも含む可能性を持つ、脱アイデンティティ的なアイデンティティとなっていった。このような意味でのクイアーという言葉の普及の背景には、あるアイデンティティを基盤に抵抗を試みるのがかえってそのカテゴリーを強化してしまうことになるというジレンマがあったのである。社会構築主義的見解においては、性のカテゴリーは虚構でしかないのに、ひとつのセクシュアリティ・ジェンダーを抽出してカテゴリー化することこそが、再び既存の性の力学に取り込まれるという悪循環を生み出すことになってしまうのである。この意味においては、クイアーなどと新しい項をいくらつくっても、またそこでの位階化と対立を生み出す危険を孕んでいる。よって、クイアーとは、アイデンティティという

よりはむしろ、現状の性の秩序に抵抗を試みる際のパースペクティブと解釈されるべきであろう。

エイズ問題の出現がひとつの契機となって、様々な性的マイノリティがACT-UP (AIDS Coalition to Unleash Power)、Queer Nation等の組織において結集する機会が増えつつある。また、アカデミズムにおいても、クイアー・スタディーズという領域が台頭しつつある(8)。そこには、セクシュアリティの二項対立の脱構築の企図、セクシュアリティとアイデンティティの結びつきへの懐疑があると言える。だからといって、ゲイ・スタディーズが、クイアー・スタディーズに発展解消されなければならないということではない。しかし、クイアー・スタディーズが従来の研究領域のタコツボ的な寄せ集めであってはならない。クイアー・スタディーズは従来のアイデンティティや権力構造の認識を相対化するコミュニケーションの場を提供し、新たな連帯の可能性を模索する。そこでは、自己の体験を絶対視するあまりナイーブに主張されるアイデンティティも見直される。

クイアー・セオリー (queer theory) という概念を持ち出したという意味で、クイアー・スタディーズの嚆矢とされるテレサ・デ・ローレティスは、ゲイとレズビアンの共同戦線は必要であるが、「レズビアンとゲイ」という表現では、差異は示唆されてはいるが、「と」という接続詞によって、いずれ自明なこととなり、あるいは隠蔽さえされてしまうという危惧を抱いている (De Lauretis, 1991)。そこで、クイアーという言葉を用いることによって、ジェンダーが曖昧になるというのではなく、むしろ、男女それぞれに異なる状況の拡がりと性質について、明確かつ生産的な認識をもつことが希求されている。

また、クイアー・スタディーズと言われる枠の中に位置付けられることが多く、かつ輝かしい業績を残している理論家の一人であるジュディス・バトラーは、自分の研究の位置づけを次のように断言している。「問題がいくつかあるのです。というのは、クイアー理論のなかに、反フェミニズム的なものがあるからです。それに、もしもクイアー理論をやっている人が、セクシュアリティの分析とジェンダーの分析を根本的に分けて考えることができると主張するならば、私の立場は、そういった人たちとは真っ向から反対するものになります。(中略) 私には、フェミニズムから乖離したクイアー理論をやってそれと戦うなんてことは、由々しき間違いだと思ふのです」(Butler, 1994=1996:49)。

このような意味において、本稿の視点は、クイアー・スタディーズに活かされなければならない。セクシュアリティとジェンダーという変数を同時にみていくことによって、クイアー・スタディーズは、多元的な視座を獲得し、従来の研究領域の閉塞状況を脱することができるのである。

#### 註

(1) 同性愛者・同性愛を厳密に定義することは難しい。Michael, et al. (1994=1996) では、調査にあたって、同性愛を行動・欲求・自己認識の3つの尺度で捉えている。

#### 参考文献

- Bersani, Leo, 1988, "Is the Rectum a Grave?", in Crimp, Douglas (ed.), *AIDS: Cultural Analysis/Cultural Activism*, The MIT Press. = 1996, 酒井隆史訳「直腸は墓場か?」『批評空間』Ⅱ-8
- Butler, Judith, 1994, "Gender as Performance: An Interview With Judith Butler", in *Radical Philosophy* 67. = 1996, 竹村和子訳「パフォーマンスとしてのジェンダー」『批評空間』Ⅱ-8
- Connell, R.W., 1995, *Masculinities*, Polity Press.
- Dankmeijer, Peter, 1993, "The Construction of Identities as a Means of Survival: Case of Gay and Lesbian Teachers", in De

- (2) 「第三の性」という固定的で本質主義的なカテゴリーを基盤にしたこのような理論枠組みは、今日社会構築主義の立場から批判されている。
- (3) ホモエロティシズム(同性への愛情)とホモセクシュアリティ(同性への性欲)との関係については、Mosse (1985)を参照。両者の間には決して厳密な境界線が引かれたわけではなかった。
- (4) フーコーは、たしかにミソジニーの問題を指摘しなかったが、あくまでも現代とは違った自己と性の関係のありかたとその結節点を系譜学的に探究することがフーコーの本意であったと解釈できる(Foucault, 1984c=1984)。
- (5) Connell (1995)においても、男性性の分析にゲイの問題は取り上げられている。
- (6) 1969年6月のストーンウォール事件は、ニューヨークのグリニッジヴィレッジにある同性愛者の溜まり場であった「ストーンウォール・イン」という酒場を、警察が手入れしたことに同性愛者たちが反発して、騒動を巻き起こした事件である。これを機に、解放運動は全米に展開され、その後一年の間に、全米各地に十指に余る同性愛解放団体が結成された。
- (7) セクシュアリティの歴史化、同性愛者の歴史的形成過程、本質主義的なセクシュアル・アイデンティティの問題性については、拙稿(1996b)において詳論している。
- (8) クイアー・スタディーズの認識論的な革新性については、拙稿(1997)において考察を試みている。

- Cecco & Elia (eds.), *If You Seduce a Straight Person, Can You Make Them Gay?*, Harrington Park Press.
- De Lauretis, Teresa, 1991, "Queer Theory and Lesbian and Gay Sexualities : An Introduction", in *differences*, vol.3, no.2.
- Edwards, Tim, 1994, *Erotics & Politics*, Routledge.
- Foucault, Michel, 1976, *Histoire de la Sexualité vol.1 La Volonté de Savoir*, Gallimard. = 1986, 渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ——  
—知への意志』新潮社
- , 1984a, *Histoire de la Sexualité vol.2 L'Usage des Plaisirs*, Gallimard. = 1986, 田村俣訳『性の歴史Ⅱ——快楽  
の活用』新潮社
- , 1984b, *Histoire de la Sexualité vol.3 Le Souci de Soi*, Gallimard. = 1987, 田村俣訳『性の歴史Ⅲ——自己への  
配慮』新潮社
- , 1984c, "Le Sexe comme une Morale" in *Nouvel Observateur*, 6/28-7/5, Gallimard. = 1984, 浜名優美訳「ひとつ  
のモラルとしての性」『現代思想』1984年10月号
- Frye, Marilyn, 1983, *The Politics of Reality*, The Crossing Press.
- Halperin, David M, 1995, *Saint Foucault : Towards a Gay Hagiography*, Oxford University Press.
- 伊野真一, 1996a, 「南方熊楠のゲイ・セクシュアリティ論と日本の近代」『クィア・スタディーズ96』七つ森書館
- , 1996b, 「ゲイ・アイデンティティの成立と終焉」第69回日本社会学会大会報告
- , 1997, 「Queer Studies の射程」『クィア・スタディーズ97』七つ森書館
- Michael, R.T., Gagnon, J.H., Laumann, E.O., & Kolata, G., 1994, *Sex in America*, CSG Enterprises, Inc. = 1996, 近藤隆文訳  
『セックス・イン・アメリカ——はじめての実態調査』日本放送出版協会
- Mosse, George L, 1985, *Nationalism and Sexuality*, The University of Wisconsin Press.
- Oosterhuis, Harry, 1991, *Homosexuality and Male Bonding in Pre-Nazi Germany*, The Haworth Press, Inc. = 1995, 辰巳伸知,  
月川和雄訳「ナチス以前のドイツにおける同性愛と男性結社」『イマージ』1995年11月号
- Rich, Adrienne, 1980, "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence", in *Signs*, vol.5, no. 4. = 1989, 大島かおり訳  
「強制的異性愛とレズビアン存在」『血、パン、詩』晶文社
- 笹田直人, 1995, 「ゲイネスとホモセクシュアリティ」『イマージ』1995年11月号
- Sedgwick, Eve Kosofsky, 1985, *Between Men : English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press.
- , 1989, "Across Gender, Across Sexuality", in Butters, R.R., Clum, J.M., & Moon, M., (eds.), *Displacing  
Homophobia : Gay Male Perspectives in Literature*, Duke University Press. = 1993, 石塚久郎訳「アクロス・  
ジェンダー、アクロス・セクシュアリティー (抄)」『文藝』1993年8月号
- Sombart, Nicolaus, 1991, *Die deutschen Manner und ihre Feinde*, Car Hanser Verlag. = 1994, 田村和彦訳『男性同盟と母  
権制神話』法政大学出版局
- 渡辺恒夫, 1986, 『脱男性の時代』勁草書房
- Weeks, Jeffrey, 1985, *Sexuality and its Discontents*, Routledge.
- Wittig, Monique, 1980, "The Straight Mind", in *Feminist Issues* (Summer).

(いの しんいち)